

学校経営方針でも示している「かがやき」は、サブフレーズに「一人一人のかがやき」が「かがやき」が「かがやき」のために、特別支援教育の理解と実践は、なくてはならないものです。教職員や児童のみではなく、保護者・地域の皆さんを含めたみんなでやることで、より大きな成果が得られ、誰もが生きやすい世界が広がります。そこで今号より、裏面に本校の特別支援コーディネーターである山下健一教諭が特別支援教育に関するコラムを掲載していきます。ぜひ、ご覧いただけます。子育てなどの参考にしてください。また、質問や相談などがあれば、遠慮なく鳴鼓小へご連絡ください。

## みんなちがって みんないい～（その1）

### ～共生社会をめざして～

新年度が始まり、1ヶ月が過ぎようとしています。鳴鼓小の子供たちの様子を見てみると、大きな声で挨拶を交わしたり、笑顔で運動場を駆け回ったりするなど、元気な子供がほとんどです。しかし、挨拶を交わそうとしても、声を出せずにいる子供、また、教室を覗いてみると、学習内容をよく理解できずに困っている子供など、何らかの困り感をもっている子供たちがいます。

私は、3年間本校で、特別支援教育コーディネーター及び、なづみ学級担任をさせていただいています。今年度は、学校の中で困り感をもっている子供たちについての理解と、その子供たちへの関わり方（指導や支援など）について、「特別支援教育」の観点から情報を発信していきたいと考えています。どうぞ、よろしく願いいたします。

なお、記事の内容につきましては、昨年度まで時津町内の小中学校で、「特別支援教育」に関する指導助言を行っていただいた木村栄先生（現平戸市立田平北小学校勤務）の文献を参考にさせていただいています。

まず、第1回目は、「発達障がい」についてお話をさせていただきます。子供たちは、先ほど紹介したように、学校生活の中で、様々な学習活動や人間関係を通して、学んでいく中で、困り感をもつことがあります。その中でも、特に知的発達に遅れは見られないのに、教師の指示に従えなかったり、落ち着きがなく席を離れてしまったりする子供がいます。

また、集団活動が苦手で、なかなか友達の輪に入れなかったり、一人でいることを好んだりなど、少しい他の子供とは違っている、何か変だなあと感じる子供がいます。

他にも様々な特徴がありますが、これらの子供の中には「発達障がい」と言われる子供たちがいます。

主な発達障がいは、LD（学習障害）、ADHD（注意欠如/多動症）、自閉スペクトラム症（高機能自閉症・アスペルガー症候群・広汎性発達障がい等含む）がよく知られています。

他にも「発達性協調運動障害」や「選択性緘黙（場面緘黙）」など、発達障がいと呼ばれる症状は多くあります。

平成24年度の文部科学省による調査では、通常学級に在籍する児童生徒で、発達障がいの可能性があり、学習面や生活面で著しい困難を示す児童生徒が6.5%の割合で存在しているとの結果が出されました。これは、著しい困難を示している状況であると判断をした児童生徒なので、学習理解ができていないのにおとなしい性格のため見過ごされたり、本人の不断の努力で何とか頑張っている状況だったりする児童生徒は含まれていません。周りが気付いてあげられないだけで、本人はとても困り感を抱えたままで過ごしている数を合わせると、10%を超えるのではないかとされています。

これから少しずつ発達障がいについてお話していきますが、その前に「障がい」をどう考えるかということから始めたいと思います。

私は近年、近視で老眼が進んできています。近視なので遠くがよく見えませんが、老眼が進み手元が見えづらくなりました。そのため、普段は老眼鏡（遠近両用メガネ）を使っています。つまり、私はメガネが無いと「遠く」も「近く」も見るのが難しいので、障がいがあります。しかし、メガネを使うと障がいがなくなります。車椅子を使っている人にとって歩道橋は障がいですが、横断歩道は障がいにならないということになります。つまり、障がいというのは社会環境との関係で現れたり無くなったりすることなのです。ですから、その人が「障がいをもっている」のではなく、社会生活を営む上で「障がいがある」と考えるべきだと言えます。

障がいは三つの要素から構成されていると言われてきました。インペアメント（欠損）・ディスアビリティ（能力不全）・ハンディキャップ（社会的不利）です。でも、前述の考え方で言えば、つまるところ「ハンディキャップ（社会的不利）」に行き着くと言えるのではないのでしょうか。

学校も同様で、学校生活を営む上で、障がい（ハードル）がある子供たちがいます。

これらの子供たちに、適切な指導や支援をすることが学校の大きな課題です。

次回から、それぞれの詳しい障がいの特徴と学校で行われている支援としての「特別支援教育」についてお話していきます。

（文責 山下 健一）

※医療用語の時のみ「障害」と漢字を使用しております。